

サザエ標識放流試験－Ⅱ*

翠 川 忠 康・木 村 創

近年サザエの種苗生産技術が開発されつつあり、今後これらの人工種苗を用いての放流が考えられるため、前年¹⁾に引き続いて放流技術の基礎資料を得る目的で、人工種苗による試験を実施した。なお放流場所を2ヶ所選定した理由は、高水温のため天然にはサザエが棲息しない海域に新しい漁場を拡大すること（里野地先）と、乱獲によりサザエが減少した海域で資源の回復・増大をはかる（加太地先）ことを目的としたためである。

方 法

放流場所：放流場所は図1に示す西牟婁郡すさみ町里野地先及び和歌山市加太地先である。

放流月日：里野地先 1983年9月17日

加太地先 1983年9月20日

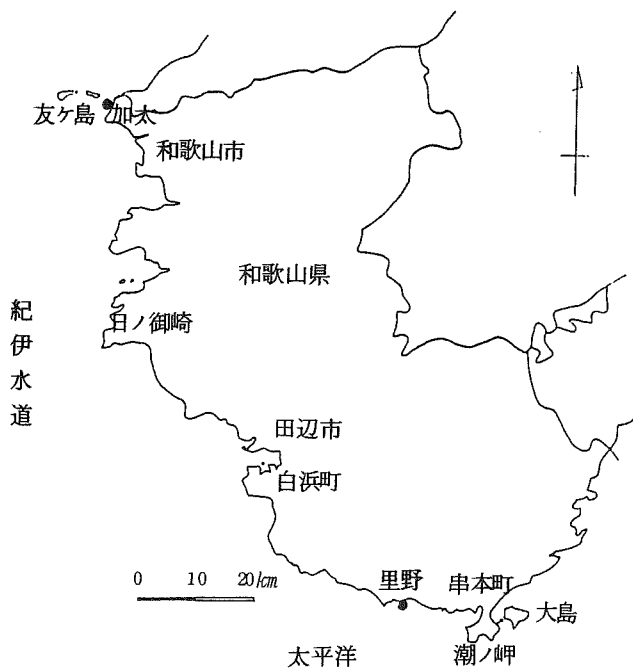


図1 サザエ放流場所
● 放流場所

* 浅海増養殖試験事業費による

供試貝：1980年8月採卵・人工生産した種苗で、約3年間陸上池で飼育したものである。里野地先放流群は図2に示す平均殻高41.6 mm(殻高範囲31.3~55.3 mm)の稚貝300個，加太地先放流群は図3に示す平均殻高39.0 mm(殻高範囲30.4~47.8 mm)の稚貝1,800個を用いた。

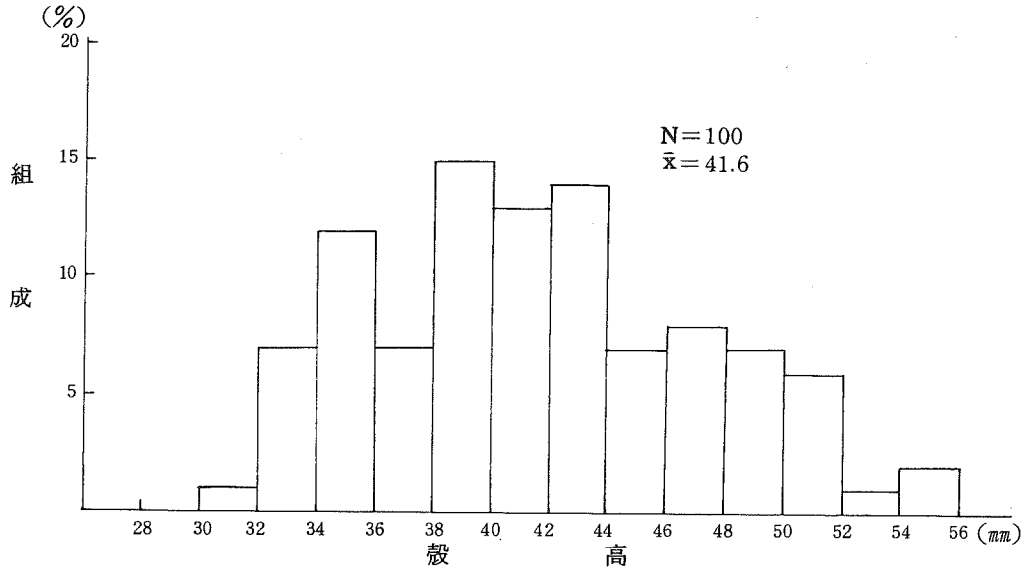


図2 里野放流サザエの殻高組成

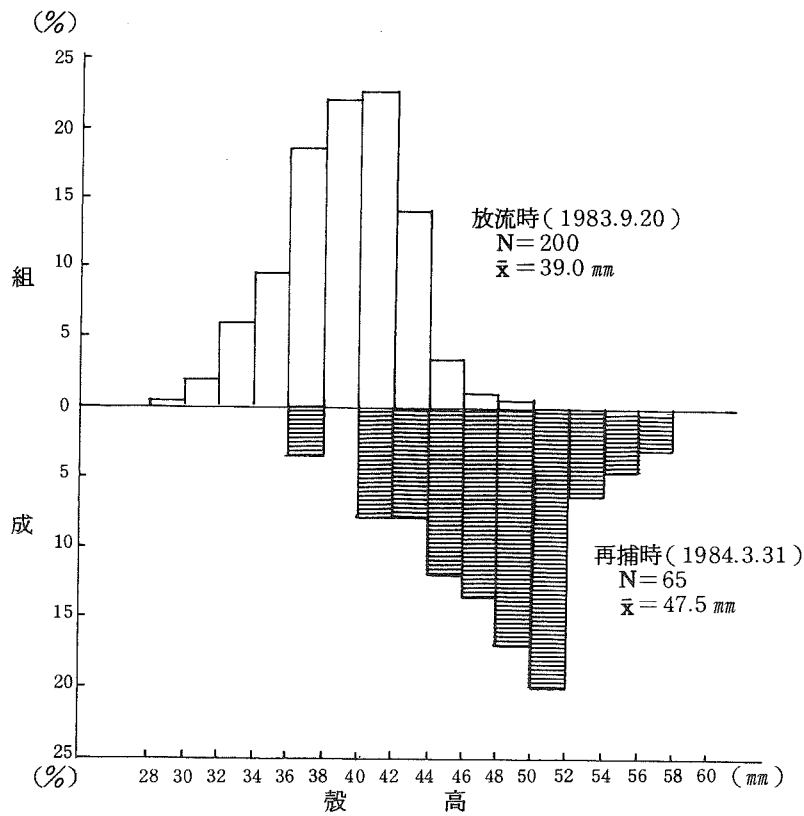


図3 サザエの放流および再捕時の殻高組成

標識方法：図4に示すとおり，殻口の縁より約0.5 cm内側の部分に電気ドリルで径1 mmの穴を1個開け，ステンレス線（径0.5 mm）を通し，それに径約3 mmのビーズ玉を取付け，結着した。

放流方法：里野地先ではスキューバ潜水により全数を岩盤上に放流したが，加太地先では約1/3をスキューバ潜水により岩盤上へ放流したが，残りは船上より岩盤域に放流した。

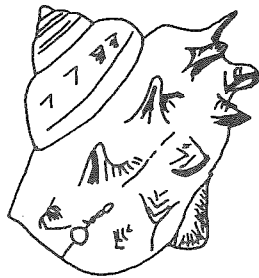


図4 標識装着部位

結 果

放 流：里野地先では稚貝をビニール袋より出して岩盤上に放つと多数のフグ類・ベラ類・ニザダイ類が蟄集し，匍匐しようとするサザエの触角や腹足に襲いかかり，かみ取るのがみられた。加太地先でも同様のことが観察されたが蟄集する魚類は数も種類も少なく里野地先の1/3程度であった。また放流海域の植物相は里野地先がネジモク，ヨレモク，ナラサモ主体のガラ藻場，加太地先がカジメ・テングサを主体としたカジメ藻場であった。

再捕結果：ここでは1984年3月31日実施した加太地先放流群について述べる。採捕は2人が約1時間のスキューバ潜水により行い，放流サザエ66個，死殻82個の計148個を採集した。当日は全国的に低水温が続いている時期であり，仮死状態のマダカアワビや斃死したトコフジ等は観察されたが，サザエではそのような個体は観察されなかった。

再捕したサザエの殻高組成を図3の下段に示した。再捕時の平均殻高は47.5 mmであり，放流後192日間で平均8.5 mm成長しており，平均日間成長量は44.3 μ /日となった。また採集した放流サザエの死殻のうち放流後成長の認められる個体と認められない個体の殻高組成を図5に示した。

標識については採集した放流貝148個のうち，脱落した個体が3個（生きた個体1，斃死個体2）であり，他の個体はステンレス線が錆びることなく結着していた。またステンレス線の結着のゆるい個体以外はほとんど貝殻の内側に出ていた部分を真珠層で包み込んでいた。

文 献

- 1) 翠川忠康，1984：サザエ標識放流試験，本誌第15号，35～37

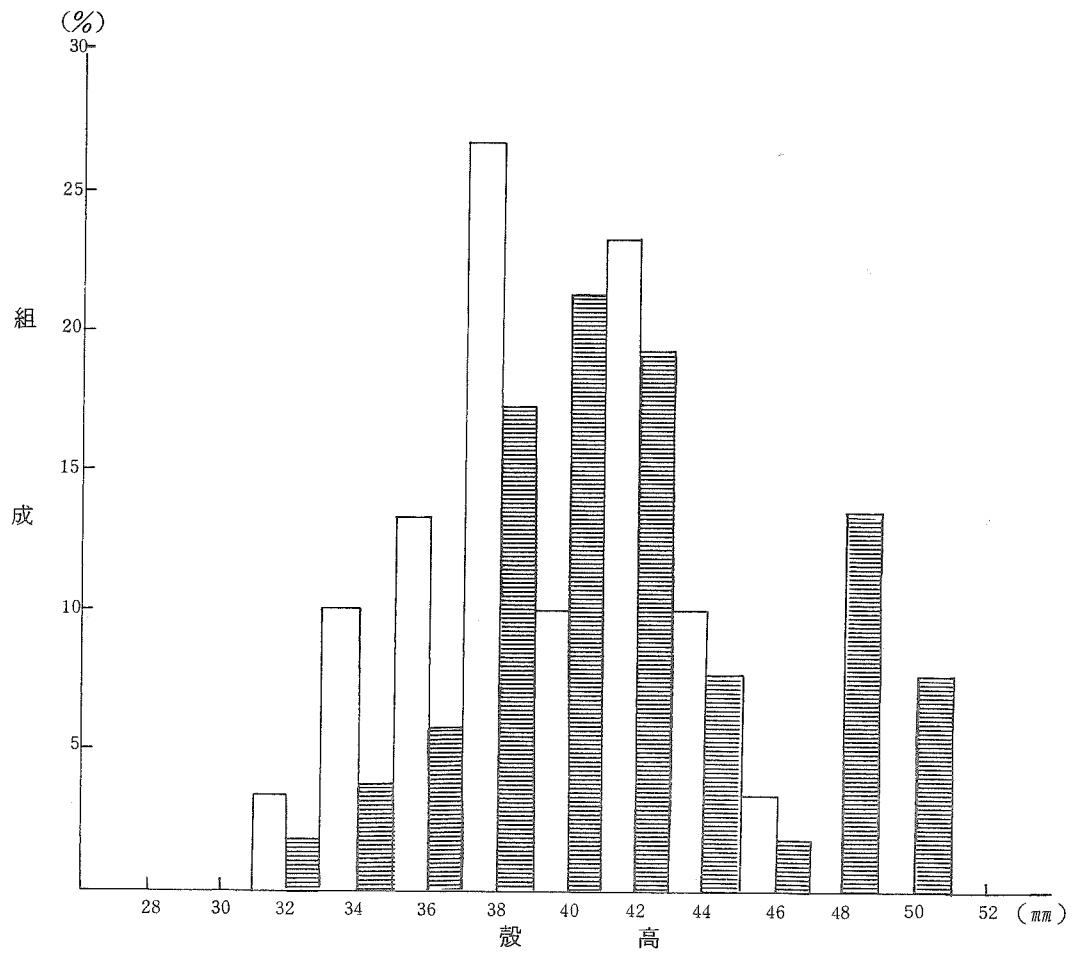


図5 放流サザエ斃死個体の殻高組成

成長あり N=52 成長なし N=30